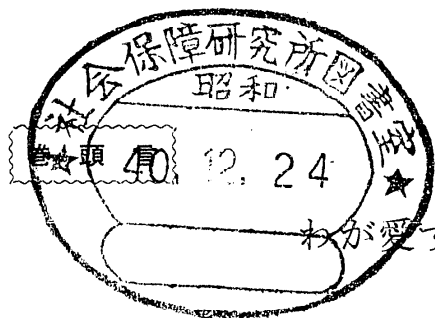




わが愛する書のおもい出

長 沼 弘 毅

ぼくの若い心のなかに、社会問題とか生活問題とかいうテーマの火を点ずるきっかけをつくってくれたのは、イギリス労働党の機関紙 (1920 年末当時) *New Leader* の常任執筆者 Brailsford (the realist という匿名を用いていた) の著書 *The Living Wage* という小冊子であった。これは、昭和 2、3 年の頃のことである。

それから濫読時代がかなり長い期間つづくのだが、これらの関連書がわが書架群書の一隅に、色も褪せ手垢をにじませながらも、一種の記念塔のようにスクラムを組んで誇らしげに屯している。これは壮観である。なかでも、特におもい出の深いのは、Eleanor Rathbone 女史の *The Disinherited Family* で、家族手当の必要をかき口説くようにのべ立てた本である。サブ・タイトルに、*A Plea For Direct Provision for the Costs of Child Maintenance through Family Allowances* とあるのをみても、内容がすぐわかるであろう。1927 年の第 3 版であるが、当時としてはかなり意義のある新しい啓蒙の書であった。その読後感に鉛筆で、*melancoly* とあるのは、あまりに悲惨な生活の実態が活写されていたためであろうか。

つぎには、シカゴ大学の助教授 Paul H. Douglas の *Wages and The Family* で、これは、表紙に、“An unusually interesting analysis of the new family wage system……” とあるので、内容をご想像願えるだろう。1925 年初版だが、丸善の書棚でこれを発見したぼくは、洋書部主任の故 N 君に、5 部あったのを、「全部買い占めたい、後刻金を都合して来るからよろしく頼む」といいおいて帰ったが、おもうように金策がはかどらず、翌日の午後ようやく金を持って行くと、N 君いわく、「まことにすみませんが、あなたが帰って行かれたすぐあとで、ある先生がお出でになり、あなたとおなじような要求をなさいましたから、実は先約がと申しあげたところ、その先約者とは自分で話をつけるから、とにかく 3 部だけ売ってくれと仰せられました。毎度ご最良の先生なので、むげにお断わりするわけにもいきませんので、すまないこととは知りながら 3 部お売りしてしまいました」とのこと。腹が立ったがいまさらどうにもならず、のこりの 2 部を買って、すぐごとと家に帰ったが、その後いろいろと N 君の口裏を引いてみると、“3 部先生氏” は、大阪商大の初代総長故河田嗣郎先生であった。先生の名著『社会問題体系』全 5 巻は、Douglas の著に負うところが、すこぶる多かったことは、腹を立てたぼくが誰よりも一番よく承知している。

3 部分の金が残ったので、なにかほかに“よからん本もがな”と、近着予定表をみせて買ったところ、Seeborn Rowntree の *Poverty—A Study of Town Life* (1922) 改訂版が載っているではないか。早速、これを予約して前金を払ってから帰途についたのだが、これこそわが開眼の名著で、社会保障問題のぼくの研究は、この本なくしては行なわれなかったであろう。(拙訳『貧乏研究』昭和 34 年 11 月、ダイヤモンド社) 似たような名著に Dr. E. Engel の *Die Lebenskosten Belgischer Arbeiter — Familien früher und jetzt* (森戸辰男訳『ベルギー労働者家族の生活費』昭和 16 年 1 月、栗田書店) があるが、ぼくが自分で手塩にかけた (?) Rowntree のほうに軍配をあげるのは、当然のことであるし、また客観的にも正しいとおもっている。

なお、あまりよく知られてはいないが、1932 年版の Barbara Nachtrieb Armstrong の *Insuring The Essentials* は、(サブ・タイトルに *Minimum Wage Plus Social Insurance—A Living Wage Program* とある) 社会保障問題の領域に足を踏み入れる人びとにとっては、必読の系統的入門書といっておこう。

以上、わが愛する書物のおもい出の一端である。